

P-169

救急医療に携わる看護師の専門職的自律性とリーダー役割との関連：領域別分析

長野赤十字病院 看護部

○竹内 ^{なけうち} ミカ ^{みか}

【目的】救急医療に携わる看護師には、専門職として自律的に行動することが必要であり、また、24時間の勤務体制において勤務毎のリーダー看護師がリーダーシップを発揮し、看護師のチームメンバーと共に、重症患者への適切な看護の提供や多職種との調整を図っていくことも求められる。救急医療の現場である救急外来、ICU、HCUにおける看護師の専門職的な自律性と、勤務毎のリーダーである看護師のリーダー役割を遂行できる能力の自己評価の定量化、ならびに、その相互関係を分析したところ、相関解析では、リーダー看護師の専門職的自律性と勤務帯リーダー役割能力には、正の相関があることが判明した。この結果から、リーダー看護師は、専門職的自律性が高いほど、勤務帯リーダー役割の遂行する能力が高いことが示された。そこで、本研究では、救急外来、ICU、HCU別における看護師の専門職的な自律性と、勤務毎のリーダーである看護師のリーダー役割を遂行できる能力の自己評価の定量化、ならびに、その相互関係を明らかにすることを目的とした。対象：研究協力が得られた救命救急センターと基幹災害拠点病院の両方に登録されている医療機関の救急外来、ICU、HCUに勤務しリーダー役割を担っている看護師427名を対象とした。対象の選定施設は、厚生労働省に登録されている救命救急センター266医療機関と基幹災害拠点病院59医療機関との両方に登録されている54医療機関を調査協力依頼医療機関と選定した。研究方法：量的記述的研究を郵送留め置き（2週間）による無記名自記式質問紙調査法にて実施した。結果：調査票配布数427部、回収数261部（回収率61.1％）であり、232部（54.3％）の有効回答を分析対象とした。分析結果を踏まえ、今後の課題とあわせ報告する。

P-171

初診時に指摘された前立腺癌の肺転移は予後規定因子となるか

京都第一赤十字病院 泌尿器科

○堀内 ^{ほりうち} 大介 ^{だいすけ}、宮崎 慎也、岡本 麻、石田 博万、中ノ内恒如、三神 一哉

【目的】一般的に遠隔転移を有する前立腺癌症例は予後が悪いと考えられている。しかし前立腺癌取り扱い規約には肺転移に関する記載が無いなど、肺転移を認める前立腺癌の頻度や実際の予後には不明な点が多い。そこで今回、初診時にstageD2の診断となった症例から、肺転移を認めた前立腺癌症例の臨床的検討を行った。【方法】2011年1月から2017年2月までに当院で診断された、前立腺癌stageD2症例（57例）のうち、初診時に肺転移を認めた症例をretrospectiveに検討した。【結果】57例中13例（23%）で初診時より肺転移を認めた。年齢の中央値は76歳、iPSAの中央値は56 ng/mlであった。GSは9が7例、8が4例、7が2例であった。13例中、骨転移を合併した症例が7例、リンパ節転移を合併した症例が2例、リンパ節＋骨転移を合併した症例が1例、肺転移のみを認めた症例が3例であった。肺転移は全例が多発であった。治療は13例全例に内分泌療法が行われ、初期治療後の肺転移果に対する治療効果はCR6例、PR5例、評価不能2例（drop out 1例、評価前に癌死1例）であった。特に、肺にのみ転移を有する3例は全てCRであった。【結論】初診時に肺転移果を有する症例に対する内分泌治療の反応性は比較的良好であった。観察期間は短いものの、初診時における肺転移の存在は予後規定因子とはならない可能性が示された。今後もより多くの症例で検討する必要があると考えられる。

P-173

小児の舌下部に発生した類皮嚢胞の1例

深谷赤十字病院 歯科口腔外科¹⁾、深谷赤十字病院 外科²⁾

○宮本 ^{みやもと} 勲 ^{いさお}、小山 知芳¹⁾、伊藤 博¹²⁾

【緒言】類皮嚢胞は、胎生期に外胚葉成分が第1、2鰓弓の癒合部に陥入することや外傷、手術などによる上皮組織の迷入により生じる疾患とされている。類皮嚢胞は、全身に発生するが顎口腔領域での発生は比較的低く、好発年齢は20歳前後である。今回、小児の口底部に生じた類皮嚢胞の1例を経験したので報告する。【患者】6歳、女児。【主訴】口腔内腫瘍の精査、加療目的。【既往歴】扁桃腺炎。【家族歴】特記事項なし。【現病歴】2015年10月 食事中に食べ物か舌下部にあたり、傷ができたのを自覚した。同月近医歯科受診し、舌下部に腫瘍を指摘され、精査・加療目的に当科紹介受診となった。【処置および経過】初診時口腔内所見では、口底部正中粘膜下に鶏卵大、類球形で弾性軟の可動性のある白色の腫瘍を認めた。また、同部の粘膜は正常色で、自発痛および圧痛は認めなかった。CT画像所見では、口底部に境界明瞭で卵円形の低密度な領域を認め、腫瘍内部は比較的均一だった。MRI画像所見では、境界明瞭で、T1強調画像で低信号、T2強調画像で著明な高信号を示しており、内部は均一であった。臨床経過、臨床所見、画像所見より、口底部類皮嚢胞または類表皮嚢胞疑いと診断し、2016年2月全身麻酔下にて嚢胞摘出術を施行した。病理組織学的には、重層扁平上皮に被覆された嚢胞性病変だった。壁内には一部毛皮、皮脂腺や汗腺が認められ、内腔には変性角質成分が多量に貯留していた。以上より、病理診断は類皮嚢胞であった。【結語】術後15か月が経過し、再発および合併症等なく経過良好である。まれに組織の残存により再発した例も報告されているため、今後も慎重に経過観察を行う必要があると思われる。

P-170

前立腺全摘除術を受けた患者の尿失禁に対する思い

長野赤十字病院 B4病棟

○竹田 ^{たけだ} 千枝 ^{ちえ}、酒井由香里、本藤恵理子、藤澤 舞

【背景と目的】A病院では平成25年ロボット支援下前立腺全摘除術（以下RARPとする）が導入された。術後は尿道括約筋の損傷、膀胱尿道角の変化などにより腹圧性尿失禁がみられる。尿失禁が患者に与える苦痛は非常に大きく、苦痛や不安を取り除くための看護介入は重要である。平成28年クリニカルパス改正により入院期間が短縮され、尿失禁の多い患者から不安の訴えが聞かれるようになった。RARPを受け、不安を抱きながら退院する患者が尿失禁に対してどのような思いを抱いているのか明らかにした。【方法】対象者はRARPを受け尿失禁がある患者で、研究同意の得られた患者9名。データは退院一ヶ月後の再診時に半構造化面接を用いて情報収集した。分析は質的帰納的方法で行った。本研究はA病院内倫理審査会の承諾を得て実施した。【結果・考察】尿失禁に対する思いの分析の結果、抽出されたコードは97、サブカテゴリーは31、カテゴリー11、大カテゴリーは3つに分類された。患者は退院直後より【予測を超えた尿失禁の実現】に直面し、何とか【尿失禁をコントロールしようとする】対処や工夫をする中で【時間の経過とともに尿失禁に対する負担が軽減】していることを感じた。RARPを受けるのはがん患者であり、命が助かることを優先的に考え、術後の後遺症まで気が回らない。術後落ち着いた時期に再度パンフレットを用いて説明を行うことで、ショックや術前のイメージとのギャップを軽減できる可能性がある。またパッドの当て方や処理方法、骨盤底筋体操の取り組みに対しても支援が必要である。そして、不安を表出しやすいような環境を提供する共に、退院後も継続的なサポートができるような体制を整えていく必要がある。

P-172

急激に増大した副腎腫瘍の1例

石巻赤十字病院 泌尿器科¹⁾、石巻赤十字病院放射線科²⁾、

石巻赤十字病院病理検査科³⁾

○神山 ^{かみやま} 佳展¹⁾、鈴木 健大¹⁾、石井 智彦¹⁾、袴塚 崇²⁾、板倉 裕子³⁾、高橋 徹³⁾

【症例】68歳男性【主訴】左側腹部痛【既往歴】右腎癌術後【現病歴】2013年に右腎癌に対して右腎摘除術を施行。病理所見はRCC,clear cell carcinoma,pT1bcN0cM0,v0,Iy0であった。術後、再発なく経過していた。2016年12月、健診心電図で異常を指摘され近位循環器内科を受診。その際のCTで右肺の異常陰影を指摘され、当院呼吸器科に紹介となった。原発性肺癌の可能性は低く経過観察となったが、その際のCTで径3.8cmの左副腎腫瘍を指摘され、腎癌手術を施行した近医へ紹介となった。数日後、左側腹部痛を主訴に当院救急外来を受診。CTで5cm大の左副腎腫瘍と後腹膜出血を認めた。即日、経皮的動脈塞栓術を行った。急激に増大した副腎腫瘍からの出血で、当院腎臓内科で内分泌の検査を行ったが、異常分泌は認めなかった。CTガイド下生検の結果、原発性副腎癌と診断された。発表当日はその後の治療経過を含めて報告する予定である。

P-174

口腔ケアスクリーニング評価の実態と今後の役割

前橋赤十字病院 歯科口腔外科

○田中 ^{たなか} 淳子 ^{じゅんこ}、高坂 陽子、難波 侑里、江原 彩莉、木村千亜貴、小野里有紀、黒岩 明里、高橋紗也子、伊藤佐里子、五味 暁憲

【目的】当院では、全入院患者に対して看護師による口腔ケアスクリーニング（以後OCS）を実施している。評価内容は、口腔乾燥、清掃不良、舌苔、口臭、痰、有害事象（出血、口内炎、潰瘍、他）の6項目であり、評価を点数化している。そこから重度汚染患者を歯科衛生士が抽出し、当科介入の必要性の有無を提言している。今回、歯科に直結している有害事象で抽出された患者の、当科介入の実態を調査し、今後の役割を明確にすることを目的とした。【対象および方法】平成28年4月～平成29年3月の期間に、OCSを実施した1028例の内、有害事象で抽出された患者270名を対象とした。検討項目は、主科、評価回数、栄養経路、当科での介入方法、治療回数や内容をカルテから調査した。【結果】対象となった診療科は、15科であった。評価回数は、1回目から3回目までが194名であり、同一患者で、2回以上の評価対象者は59名であった。栄養経路は、禁食や経管栄養患者が202名であった。また当科治療回数が5回以上の患者は9名であり、呼吸器外科、耳鼻科、救急科の悪性腫瘍や事故による患者であった。摂食機能療法や専門的口腔ケア介入は54名、既に介入していた患者を含むと119名、また周術期口腔機能管理が37名で、介入内容は、口唇粘膜炎、舌炎、咬傷であった。【考察および結論】早期に口腔トラブルを発見する事は、速やかに口腔環境整備に繋がり、本来の治療遂行の一助となる。また、継続的な口腔機能管理も再発予防に有効であった。看護師の継続的なOCSは、口腔の症状緩和や経口摂取の支援に重要な役割を担っている。口腔観察の精度を上げ、歯科衛生士と双方向的に情報共有をすることで、患者の早期回復に貢献する。

10月23日(月)
一般演題(ポスター)
抄録